

インドのクリスチャン



バンガロールの教会



バンガロール在住
坂田マルハン美穂

キリスト教の祝祭日も国民の祝日

国土面積は日本の約9倍、人口は約10倍の巨大国家インド。その多様性を構成する多々ある要因のひとつに、「宗教」がある。80%弱を占めるヒンドゥー教徒を筆頭に、イスラム教徒が約14%、キリスト教徒2%強、そしてシーク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒と続く。私が暮らす南インドのカルナータカ州は、南西はアラビア海に面したケララ州、南東はベンガル湾に面したタミル・ナドゥ州と、キリスト教が早い時期から伝播した両州に接していることから、キリスト教徒が少なくない。その教派も様々だ。

インドにおけるキリスト教の歴史は、非常に古い。大航海時代の15世紀から16世紀にかけて、ヴァスコ・ダ・ガマやフランシスコ・ザビエルら宣教師が海を渡ってインドに上陸し布教活動を行ったはるか以前から、インドではキリスト教が信仰されてきた。十二使徒の一人、聖トマスがイエスの指示に従い、西暦52年、ケララ州に上陸し、シリア正教の基礎を創設したという記録が残されている。インドでは、ヒンドゥー教やイスラム教に並び、キリスト教の祝祭日も国民の祝日だ。

海辺に立つ白亜の荘厳な教会

わが家の近所には、1960年代に創業されたトムズ・ベーカリーという小さなスーパーマーケットがある。その名から察せられる通り、オーナーはクリスチャン。従業員もまた、その大半がケララ州のクリスチャン・コミュニティを出自としている。春、復活祭の時期になると、店舗の一部がパステルカラーで彩られたイースターエッグのお菓子や、ローズクッキーと呼ばれるバラを象ったお菓子で埋め尽くされる。また、クリスマス前には、クリスマスケーキやプラムケーキが大量に並ぶ。なお、インドでは多くの都市で牛肉の販売が禁止されているが、ここバンガロールはさにあらず。牛肉を食するイスラム教徒やキリスト教徒が少なくないことから、牛肉を販売する店はもちろん、ステーキハウスも市内の随所にある。柔らかなフィレ肉が人気の「バンガロール・ビーフ」は、インドのブランド牛とも言える。

拙宅のドライバーもメイドも教派は異なれど、敬虔なクリスチャンだ。勤続7年になるドライバーのアンソニーは、ローマン・カソリックの信者。20数年前、ヒンドゥー教徒だった女性と恋に落ち、結婚した。インドでは、異教徒間の結婚は、国際結婚と同じようなもの。家族や親戚から反対されるケースが一般的である。身内から婚姻の承諾を得られなかった彼女は、駆